

転職して数ヶ月。

今日は金曜日。

夢子につきっきりで仕事を教えてくれていた女性の先輩である美咲(みさき)と、同じく先輩である悠真(ゆうま)と、歳下ではあるが先輩の颯太(そうた)とで、夢子の歓迎会と称したゆるい飲み会が開かれていた。

掘り炬燵のある個室で四人は程よく酔っ払っている。

「あ～、あそこの営業さんはねえ言い方はキツイけど基本優しいっすよ」

「そうそう、素直にお願いしたら調整してくれるかもしれないよ」

「そうなんですか？」

「新人の夢子ちゃんだと特に優しいだろうな～」

会話の内容はやはり仕事の話だ。

なんとか一人で仕事を回せるようになってきた夢子にとって有益な情報ばかりで、夢子は真剣に聞き入っていた。

早く先輩方の手を煩わせることなく仕事をこなしたい。
会社の戦力として成長したい。

忘れないようときどきスマホでメモを取りながら聞く
夢子に、先輩三人は気持ちよく話をしてくれる。

しかし、

「夢子ちゃん、ほんと真面目で偉いね～」

隣に座っていた美咲がそう言ってふいに手を伸ばして
きて、夢子の頭を撫でた。まるで小さい子にするみたい
に。

美咲は目を細めて慈しむような表情を夢子に向けてい
る。

そこで一瞬の違和感があって。

でもそれは話しているうちに意識から消えてしまった。

仕事の話が終わって大して中身のない雑談が始まった
頃には美咲は夢子に体を寄せるように座っていた。

お喋りしながら肩も触られるし抱かれるし、背中も、
なんならテーブルの下で足まで触られた。

でも、酔っ払うとスキンシップが多くなる人なのかも
しれない。

それともそこまで夢子に気を許してくれているということなのか。もしそうならそれは嬉しかった。

「うちでもうちちょっと飲まない？」

「いいっすね～！悠真先輩も行きますよね？」

「そうだね、明日予定もないし」

先輩三人がそう盛り上がっていれば、夢子一人だけ帰るわけにもいかない。

四人は結局美咲の家へ移動することになり。

優しいピンク色のカーペットに、小さなテーブルを囲んで四人はまた中身のない話を繰り返す。

それから「もう電車もないから泊まっていけば？」

「いいっすね～、そうさせてもらいます」なんて軽いテンションで美咲の家に泊まることになってしまった。

順番にシャワーを浴び、男性二人はカーペットの上、夢子はまさかの、

美咲のベッドで美咲と一緒に布団に潜っている。

(なんでこうなった…)

なんだか気まずくて、美咲に貸してもらったスウェットを着た夢子は隣の美咲に背を向けて横になっていた。

ベッドはセミダブルサイズだろう、そんなに窮屈ではないけれど、夢子は美咲に少しでも触れないように縮こまっている。

まさか会社の先輩と同じベッドに入ることになるとは。

だけどたった一晚、一緒にご飯を食べてお酒を飲んだだけでも距離が縮まった気はする。

この三人の先輩には月曜日から話しかけやすいし、何かあったときに相談しやすいはず。

白い壁を見つめてそんなことを考える。

心地いい酔いもあって、夢子は緊張も忘れてそれからすぐに寝入ってしまった。

——夢子が目を開けたのはそれからしばらく経ったあとだった。

視界は暗闇。

一瞬ここがどこか忘れていたがすぐに思い出した。

そしてすぐに、いま自分の体に触れているものが美咲の手だと理解する。

触られているのだ。

肩から腕、そして腰を撫でて。背中を上げて。

温かい手が夢子の体をゆっくりと撫でている。

目がぱちぱちと音を立てて瞬く。状況が理解できなかった。

微かにベッドが軋む音がして背後の美咲が動いた。

夢子の背中にぴったりと柔らかい体が密着して、体を触っていた腕はまるで夢子を抱きしめるように回された。

その手は夢子の抱き心地をしばらく楽しんだあとゆっくりと上半身を降りて夢子の足まで進む。

そして、夢子の下腹部を撫で回すと細い指がその先の夢子の足の間へ入ってきてしまった。

すり……、すり…♡

指はスウェットの上から夢子の性器を確かめるように撫でている。

(うそ、うそ、美咲先輩?)

すり…♡

手前から奥まで優しく撫でて、

すり…♡

それが戻ってきて指が抜かれたかと思えば、

すり、すり…♡

夢子のクリトリスの辺りを撫で回す。

分厚いスウェットの布でそれほど指の感触は確かではないけれど、

美咲はまるでクリトリスを刺激するようにそこに指を滑らせている。

すり♡すり♡

円を描いて、

すり♡すり♡

細い中指がクリトリスに狙いを定めている。

すり♡すり、すり♡

そして指は撫でながら、

すり♡すり♡

少しずつ布を押している♡

すりすり♡

クリトリスに生地を押し付けて、

すりすり♡すり、すり♡

分厚い布の上からクリトリスを圧迫し始めていた♡

すりすり♡すりすり♡

(……、これ、やばいかも)

圧迫されて押さえつけられたクリトリスに下着の薄い布が張り付いて♡

すりすりすりすりすり…♡♡

指が描いていた円が小さくなっていく♡
クリトリスの位置がバレている♡

(や、やばい…こんなことされたら)

摩擦されるクリトリスが勝手に熱くなってしまう♡
直接触られてもいないのにその熱だけで勃起あがってしまうのが自分でも分かる♡
どくどくと血が巡って行って痛い♡

そして美咲の指はふと、

ぱふっ♡

二本の指で分厚い生地の上からクリトリスをタップし

た♡

「……、」

勃起したクリトリスをピンポイントに叩かれ一瞬体が揺れて息が漏れる♡

多分気付かれてない、そう思いたい♡

この行為を受け入れることが正解なのかまだ分からないのだから♡

美咲の手はそこでクリトリスから離れた♡

夢子は「このいたずらはこれで終わりなんだ」と安堵し体の力を抜いた♡けれどそうではなかった♡

美咲の手はまた夢子の体を撫でて下半身まで辿りつく
と今度はスウェットの中に滑り込ませてきたのだ♡

素肌に美咲の暖かい手が触れている♡

夢子の体は緊張でさっきよりも固まってしまった♡

手はスウェットを軽く下ろしながら夢子の下着まで降りてくる♡

すり…♡

そして今度は下着の上からクリトリスに触れて、

「ふふ、」

耳元で美咲の小さな笑い声がした♡

すり、すり、すり♡

今度は薄い下着の上から、

すり♡すりすり♡

クリトリスを撫で回している♡

すりすり、すり♡

皮には被っているものの、

すり♡すり♡すり♡

勃起して膨らんだその粒を、

すりすりすり…♡

あやすように摩擦している♡

すりすりすり、すりすりすり♡

「…………っ、」

クリトリスが痛い♡

息が漏れるのを我慢して体を強張らせていると余計に
感じてしまう♡

すり♡すり、すり♡

すりすりすり♡

勃起した粒の周りを強調するように撫で回したかと思えば♡

ときどき先端を掠めるように擦って♡

クリトリスがどんどん敏感になっていく♡

まるで指の指紋まで感じ取ってしまうんじゃないかと思うほど♡

「…っ、……、っ」

我慢していても腰がビクついてしまう♡

夢子が膝をぎゅっと閉じて力を入れると、それを遮るように美咲の手は夢子の足を開かせた♡

そして今まで触っていたクリトリスよりも奥、下着のクロッチの部分に指を滑らせてその部分を押しこめる♡

(あ…)

ぐちょぐちょに濡れている♡

ぬかるんだ割れ目に布が食い込もうとしてきて気持ち悪い♡

美咲はそれを分からせるようにその部分を押し込んで

きて、そしてついに、
手を下着の中へ滑り込ませてきた♡

(さ、触られちゃう、会社の先輩に、)

柔らかい女性の手がお腹から腰、鼠蹊部へと伝って降りてきて、

すぐにさっきまで下着越しに触っていた夢子の濡れたところへ辿り着いた♡

肉を搔き分けそのぬめりを纏う指♡

それがそのまま上まで移動してきて♡

ぬる、♡

夢子のクリトリスへ塗りつけるように撫であげた♡

「ふ、」

体がびくっ♡と揺れて吐息なのか声なのか分からない息が漏れる♡

ぬる♡ぬる♡

ぬる、ぬる、ぬりゅ♡

「っ、…、う」

小さなクリトリスをピンポイントに♡

指先が撫で回している♡

さっきまでの布越しの摩擦とは比べものにならない熱
が湧き上がってきてしまう♡

ぬりゅ、ぬりゅ、ぬる♡

皮の上から撫で回したり♡

ぬる、ぬるぬるぬる♡

覗いた先端だけを細かく摩擦したり♡

ぬりゅ♡ぬる♡ぬる♡ぬる♡

そうかと思えば快感を焦らすようにまた皮の上から全
体を撫で回す♡

「……ふ、う♡…ん、」

体が反応してしまうのが止められない♡

いつ間にか美咲の足に絡め取られていた足はクリトリ
スを擦られるたびにビクついて、指先まで引き攣ってし
まっている♡

ぬる、♡くるくるくる♡

ぬりゅぬりゅ、くちゅ♡

「……っん♡…、っ」

「もっと気持ちよくしてあげるね♡」

起きていることなどとくにバレている♡

美咲は夢子の耳元でそう言うと布団の中へ潜り込んだ♡

そして夢子の腰の辺りまで移動しながら夢子の体を仰向けにさせる♡

——その一瞬、悠真と颯太を確認したけれど二人は眠っているようだった。

こんなところを見られたら恥ずかしくて会社にいけない。

夢子が視線を戻すと自分の足元の辺りで布団が盛り上がっていた♡

美咲は夢子の履いているスウェットと下着をその中で引きずり下ろしている♡

その衣服は布団から覗いた手がベッドの下へ落とし、裸になった夢子の足が開かれて♡

美咲はその中へ自分の体を収めると湿った夢子の中心へ手を這わせた♡

夢子は布団を握りしめる♡

こんなこと望んでいなかったし、美咲が自分を触っていることも信じられないのだけれど、

触られるだけ触られたクリトリスは疼いてしまっているのだ♡

美咲の手がその肉を広げその中心の小さな粒に触れると、

「…っ♡」

それだけで足が跳ねた♡

指がその下のぬかるんだ割れ目を撫でて愛液を掬い取り、また、

ぬる♡

とクリトリスに塗り付ける♡

「は、あ♡」

自分の体が中心からチリチリと燃え広がっていくようだった♡

ぬる♡ぬる♡

皮から覗いた部分だけを上下に撫でて♡

ぬる♡ぬりゅ♡

ときどき円を描いて♡

ぬりゅ♡ぬるぬるぬる…っ♡

くすぐるように引っ搔いて♡

ぱた、ぱた、と足がシーツを蹴ってしまう♡

「ふ、っ」

ぬりゅりゅりゅ、ぬりゅ♡

撫でたり♡

「ん♡っ、」

ぬる♡ぬる♡ぬる♡

圧迫したり♡

「…っ、♡」

ぬりゅ、ぬる♡ぬる♡

引っ搔いたり♡

(腰が浮く…♡気持ちいい♡)

足先に力が入って、気持ちよさの余り腰を突き出して
しまう♡

そうでもしないと快感でおかしくなりそうだった♡

そして美咲は浮いた腰の下へ腕を差し込み夢子の下半
身を固定させると♡

ちゅ、♡

「ひあっ♡」

クリトリスにキスしてきた♡

柔らかい唇の感触にクリトリスが包まれて♡

すぐに今度は舌が触れた♡

れ♡

れる♡

れ♡れ♡れ♡

湿った舌が♡

クリトリスを小さく上下に弾く♡

れ♡れる♡れる♡れ♡れ♡れ♡

「ふっ♡…ッ♡ん♡」

抱えられた腰は固定され逃げることはできない♡

快感は足先まで電流のように流れていって、足の指を
ぴくぴく♡と痙攣させた♡

れる♡れ♡れる♡れ♡れ♡

唾液を塗りつけられ♡舌のざらつきを感じる頃にまた
濡れた割れ目を舐め上げてクリトリスへ戻ってくる♡

「ん♡あ♡…ッ♡っ、っ♡」

夢子は握りしめた拳をシーツに押し付け声だけは漏ら
さないように歯を食いしばった♡

れるれるれる♡れ—……♡♡れ—……♡♡

でもそうすると♡体が力んでしまって余計に感じてし

もう♡

れっ♡れる♡れっ♡れっ♡れるお♡♡

「ふっ♡あ♡あ、ん♡ん、ふっ♡」

美咲の舌は次第に激しくなっていく♡

ビクつく夢子の腰を抱えながらそこをひたすら舌で愛撫している♡

「……み、美咲せんば、」

思わず夢子が名前を呼ぶと♡

ちゅ……っ！♡♡

「…………ツツ♡♡♡」

クリトリスを皮ごと口に含まれた♡

夢子は敏感な粒に密着する美咲の粘膜の感触に声にならない悲鳴を上げた♡

ちろちろちろ…♡

その口内で舌先で舐められ♡それからすぐに♡

「う、ん……ん♡」

ちゅ、ぽ♡ちゅぽ♡ちゅぽっ♡

音を立てて吸っては解放して♡吸っては解放して♡

「ふ、く、……う♡う♡」

ちゅぱっ♡♡ちゅぱ、ちゅぱ♡

細かく吸いつかれて♡♡

「う、あ♡あ、っ♡んあ♡は♡」

体が強張る♡

腕も足もピンと突っ張っていく♡

ちゅっぱ♡ちゅっぱ♡ちゅっぱ♡れろれろれろれろれ
ろ♡♡れろおッ♡♡れろおッ♡♡…ちゅっ♡♡

ちゅぽちゅぽちゅぽちゅぽちゅぽちゅぽちゅぽ…っっ
♡♡

(気持ちいい、美咲先輩の舌も唇も気持ち良すぎる、これイっちゃう…！♡♡)

ちゅぽちゅぽちゅぽちゅぽちゅぽちゅぽちゅぽ…ッッ
♡♡

ちゅぽちゅぽちゅぽちゅぽちゅぽちゅぽちゅぽ…ッッ
♡♡

「は、っ♡あ♡っ♡ッ♡あ♡あ♡あ、あ…っ♡」

クリトリスから全身へ気持ちいい波が広がって♡
夢子はきつく目を閉じて顔を歪ませる♡

(イク♡♡イク、イク♡♡)

「ふっ、うゝ、……………ツツツ♡♡♡」

バタッ♡バタッ♡

布団の中で足が音を立てて跳ねた♡

美咲が体を起こして布団と体の間に隙間ができる♡
イって熱くなった体にひんやりとした風が当たって気持ちいい♡

美咲は掛け布団を全て剥ぎ取って、目が慣れた薄暗がりの中で夢子に跨っていた♡

「夢子ちゃん、かわいー…♡」

その手が今度は上半身のスウェットにかけられる♡
夢子にのしかかった美咲は脇腹から両腕を差し入れ服を捲り上げると露わになった胸を見て舌舐めずりをした♡

「…こっちも可愛がってあげるからね♡」

夢子ももうされるがままだ♡

美咲がそこへ顔を近付けて♡

その口から舌が覗いたところで、

「ちょっと！美咲さん！」

聞き慣れた颯太の声が響いて美咲の動きが止まった。

「ひとりでやり過ぎっすよ」

「もうそろそろ俺たちも混ざっていい？」

夢子は驚いて二人のいるほうを見る。

二人は体を起こし座っていた。いつからそうしていたのか分からない。

二人にそう声をかけられても夢子にのしかかったままの美咲は驚きもせず軽く笑った。

「二人とももうちょっと寝ててくれてもいいんだけど？」

「それは美咲がずるいだろ」

「オレたちも夢子ちゃん触りたいっす」

夢子の頭は混乱している。

「うわ、もうぐちょぐちょだ、夢子ちゃんのおまんこ♡」

夢子の足元へ近づいてきた颯太は濡れたそこを見て嬉しそうに笑った♡

そのままベッドへ上がり夢子の腰の辺りに腰掛ける♡

「美咲にクンニされて気持ちよかった？でも乳首はまだだよ」

悠真も近づいてきて、夢子の胸のあたりにかがむ♡

「乳首はまだだよ～♡今から乳首いっぱいキスしてあげるからね♡」

そしてのしかかっていた美咲が体から降りて横にぴたりと密着した♡

（な、なに、どういうこと？これ三人が計画的にやった

ってこと?)

確かめたい、けれどなんて聞けばいいのか分からない、
ぐるぐると混乱したままの夢子の頭は、

ぐ、ぶ♡♡

「これだけ濡れてるから簡単に入っちゃうっすね♡」

十分に濡れたおまんこへ入ってきた颯太の指に意識を
持っていかれた♡

「あ…っ、？」

驚いて体を起こそうとした夢子の上半身は美咲と悠真
に押し返される♡

「大丈夫♡気持ちよくなる？♡」

「ほら、乳首もちゃんとしてあげるから」

れ♡

ちゅっ♡

そして片方の乳首には美咲がキスをして、もう片方は

悠真が舌を当てた♡

(なにこれ、なにこれ、わたし…、)

「ナカはどうなんすか？気持ちよくなれるタイプ？」

ぬちゅ♡ぬちゅ、ちゅ♡ぬちゅ、ぬちゅ♡

「あ、……っ、あ♡」

一気に二本、入ってきた颯太の指は夢子の中に優しく当てられながら動き始めて♡

「クリみたいにいっぱいキスしてあげる♡」

「……ちょっと舌が触っただけでもう勃ってる」

ちゅ♡ちゅ♡ちゅー……ッ♡♡ちゅむ、ちゅ♡

れ…、れ♡♡れ♡れる♡れる♡れ～…♡♡

「あ、あッ♡あ、ん、あっ♡」

勃起かけた乳首は優しく吸いつかれ、舌で撫でられる♡

(わたし、なんで先輩三人に体触られてるの？)

ぬちゅ♡ぬちゅ、ぬちゅ♡♡ぬちゅ、ぬちゅ、ぬちゅ♡

ちゅ、ちゅむ♡ちゅむちゅむっ♡む、ちゅ♡ちゅ、ちゅ、ちゅ♡

れる♡れ～…♡れるれる♡れられられられら…っ♡

「っあ♡……っ、あ♡…ん、っ、……ふ、う♡」
「あ～、足開いてきたあ♡ナカ気持ちいいんすね♡」
「乳首も気持ちいいよね♡ビンビンだもんね～♡」
「乳輪まで張っちゃってるし」

ぬちゅちゅちゅ、ぬちゅちゅちゅ、ぬちゅちゅっ♡♡
ちゅ、ちゅうっ♡むちゅっちゅっちゅっ♡♡
れられられら♡れろお…♡♡れろ、れろ、れらっ♡♡

「んあ♡あ、っ♡あ、や、あ♡……あ、んっ♡」
「やっぱりココが好きっすか？♡」

ぐち♡♡

「んあ……ッ♡♡♡」

颯太が空いている指で濡れたクリトリスを押し潰し♡

「あっはは♡♡足ピンしちゃった♡♡」

夢子の体が跳ねる♡♡

ぐち♡ぐち♡♡ぐり♡

「…あ、っ♡それ、だめ…、です♡それしちゃだめ…」

「だめっすか？じゃあ夢子ちゃんのだめなとこ、いい子
いい子してあげなきゃ♡♡」

ぐりっ♡♡ぐりっ♡♡

敏感なクリトリスを圧迫したまま♡♡こねくり回され
る♡♡

「んあッ♡♡」

三人におまんこも両方の乳首も責められているだけで
混乱していたのに♡

加えてクリトリスまで♡♡

夢子は喉をそらしてまた体を強張らせてしまった♡♡

「夢子ちゃんクリよわよわっすね～♡♡これでイこ？♡
♡おまんこ指でずぼずぼされて♡先輩二人に乳首しゃぶ
られてイこ？♡」

「あッ、あ♡♡あ、ッは♡♡ん、あ♡♡」

おまんこに埋められている颯太の指が上側を指の腹で
圧迫するように角度を変えて♡

そのまま動き始めた♡♡

ずちゅっ♡♡ぐちゅ♡♡ぬちゅっ♡♡ぬちゅっ♡♡

ずちゅずちゅずちゅっ♡♡ぐちゅちゅちゅっ♡♡

そこから快感が広がってしまう♡♡

その気持ちいいのがクリトリスで増幅して乳首まで敏感になって♡♡

ちゅ、ちゅむ♡♡ちゅ♡ちゅ♡ちゅっちゅ♡♡ちゅむ、っ♡♡

れる♡れられら♡♡れる♡れら♡れられられら♡♡

二人がかりでその乳首をしゃぶられる♡♡

(また、イク♡イカされちゃう…！♡)

体が突っ張っていく♡

手足がガクガクと震えて♡♡

今度は声を我慢する余裕もなかった♡

「や、あっ♡♡あゝ、あ…………ツツツ！！♡♡♡」

ビクツツ！！♡♡♡

絶頂に仰け反って背中から腰まで浮いてしまった♡

「気持ちよくなってくれるの♡うれしい…♡」

「は、あ……、はあ、は、っ…」

ベッドにまた体を沈めると美咲に抱きつかれる。

胸を上下させる呼吸をする夢子の視界には美咲と、悠真と、颯太。

また流される前に、と、夢子はなんとか口を開いた。

「な、なんですか、これ…！ どうして…」

「オレたち夢子ちゃんのこと気に入っちゃったんすよね」

夢子の足の間、颯太が悪びれもせずそう言って服を脱いでいく。

「だけど誰かのものになっちゃったら残りの二人が可哀想だろ？」

悠真はまた体を屈めて夢子の胸へ近づいて。

「だから三人で夢子ちゃんを共有しようかなって♡」

そして美咲の腕は夢子を腕枕するように頭の下に差し込まれた。

「共有、って…私はモノじゃないんですよ」

「されるがままイっちゃったくせにそんなこと言っても

説得力ないって言うか♡」

「うあ…」

ぐぶ…♡♡

颯太の太いちんぽが入ってくる♡

「こんなに乳首も勃たせっぱなしだし」

れる…♡

悠真の舌が乳首の勃起を強調するように幹を舐め回し
♡

「三人がかりで気持ちよくされるんだよ？♡気持ちいい
ことは好きでしょ？♡♡」

美咲の手はクリトリスへ伸びてきた♡♡

(三人、がかりで…?)

…とちゅっ♡

「いっぱい気持ちよくなりましょうねー、夢子ちゃん
♡」

笑顔の颯太が腰を押し込んだ♡

夢子の足を更に開かせ腰を進め、自らが動きやすいよ
うに軽く腰を上げる♡

そしてその腰は前後に動き始めた♡

とちゅ、
とちゅ、
とちゅ、
とちゅ♡

「…っん、あ♡あ♡…っ♡」

三人にイカされてとろけた体の、中心を、ちんぽが突
いてくる♡

とちゅ♡
とちゅ♡
とちゅ♡
とちゅ♡

「ふ、…っ♡ん♡う♡う♡」

「気持ちいい？ 颯太のちんぽ」

れる、れる～…♡れる♡れる♡れ♡れる♡

乳首の勃起を分からせるように舐め回す悠真の舌♡

くすぐったさに近いその感覚に夢子は思わず悠真の腕
にしがみつく♡

乳首に与えられるチリチリとした快感は、おまんこの

奥からじわりと染みる快感まで体の中を走っていく♡
夢子がそれに体を悶えさせていると、

「夢子ちゃんの大好きなクリちゃん触っててあげるからね♡」

美咲の手がクリトリスへ伸びて♡
爪の先でカリッ♡とクリトリスを引っ搔いた♡

「んあッ♡」

引っ搔かれたのはクリトリスなのに♡背中から腰まで
ビリビリと響く♡

夢子はその快感に背中を浮かせ、突き出された乳首を
悠真が口に含んだ♡

ちゅっ♡♡ぢゅ、ぢゅっ♡♡

「んッ♡あぁっ♡」

唾液で濡らされ敏感な皮膚を吸われて♡

「あ～～かわいい♡乳首吸われて喘いでる夢子ちゃん見ながら腰振れるの良すぎっすよ♡」

とちゅっ、とちゅっ♡♡

颯太の腰も早くなった♡♡

とちゅっ、とちゅっ、とちゅっ、とちゅっ♡♡

腰がグラインドしてちんぽが奥に到達する瞬間、体が揺らされる♡

吸われている乳首まで悠真の口の中で揺れて、それがまた気持ちよくて♡

カリッ♡カリッ♡カリッ♡

クリトリスを引っ搔く美咲の爪も予想のできない細かい箇所を引っ搔いて足の指が痙攣してしまう♡

「あッ、あん♡♡あッ♡♡は、ア♡♡ッあ♡♡」

とちゅっ、とちゅっ、とちゅっ、とちゅっ♡♡

「夢子ちゃん♡ちんぽも気持ちいいっすか？これ気持ちいい？♡♡」

とちゅっ、とちゅっ、とちゅっ、とちゅっ♡♡

「……っ、な、あ♡♡…んっ、あ、あ♡♡」

「答えてくれないんすか～？♡♡」

……とちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅ♡♡♡

ぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんっ♡♡♡

颯太の腰が小刻みに前後に振られ出した♡

「や…ッあ♡♡あ♡♡あ♡♡あ、ア♡♡」

「言わないとずっとこうっすからね♡」

とちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅ♡♡♡

ぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんっ♡♡♡

「乳首もいいよな？」

ぢゅ…っ♡♡ぢゅッ♡♡ぢゅ、ぢゅうっ♡♡

「あ♡ あんッ♡♡あ♡、ッ♡♡」

「じゃあ…クリはこうしちゃおう♡♡」

美咲の指が二本、クリトリスを押し潰して♡

夢子の体はビクリと大きく震えた♡

そして♡♡

ぐちぐちぐちぐちぐちぐちぐちぐち……！♡♡♡

「ん♡ あ♡ あア……ッッ♡♡♡」

押し潰したままの指がクリトリスをめちゃくちゃにし
ごき始める♡♡

とちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅ♡♡♡

ぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんっ♡♡♡

ぢゅうっ♡♡ぢゅ、ぢゅるッ♡♡ぢゅるるっ♡♡

ぐちぐちぐちぐちぐちぐちっ♡♡♡ぐちぐちぐちぐちぐち

ぐちッ♡♡♡

「アッ♡♡あ、ッは♡♡あゝ あ…ッ♡♡や、や、めっ、
ああッ♡♡♡」

「おまんこビクビクしてる…♡♡ちんぽ締められてやっ
ばい♡♡」

「乳首、片方だけビンビンなっちゃったな、こっちもし
ごいてあげないと」

「あッあゝ、だめっ、両方しちゃ…」

「クリちゃんもすっごい勃起してる～♡夢子ちゃんがイ
くまでごしごし♡しようね♡♡」

「んあゝ あああ…ッ♡♡♡い、やッ♡♡♡あッ♡♡
っああ、…ッ♡♡」

とちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅ♡♡♡

ぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんっ♡♡♡

小刻みなピストンで奥を突かれ♡

ぢゅる、ぢゅる、る♡♡♡ぢゅうっぢゅっ♡♡ぢゅっ
ぢゅっぢゅっ♡♡

勃起乳首を更に勃起促進するように吸い上げられ♡

ぐちぐちぐちぐちぐちぐち…ッ♡♡♡ぐちぐちぐちぐ
ちぐちぐちっ♡♡♡

硬くなったクリトリスを押し潰したままこねくり回さ
れ♡

「な、なに、これえ……♡♡♡」

乳首もクリトリスも、信じられないくらい敏感になってしまっている♡

夢子は三人に囲まれ気持ちいいところを一緒に責められる快感にのけぞっていった♡

(むり、気持ちいい、これ気持ちいい…！)

とちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅ♡♡♡

ぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんっ♡♡♡

ぢゅ、ぢゅっぢゅうっ♡♡ぢゅるるるる…♡♡♡

ぐちぐちぐちぐちぐちぐちぐちッ♡♡♡ぐちぐちぐちぐち…ッ♡♡♡

「なん、れ♡♡っ♡♡」

「気持ちいいっすか？♡♡いいよね？♡♡」

「い、いい♡♡きもち……っ、♡♡♡」

のけぞったまま、

夢子は体をガクガクと震わせて♡♡

「…………う、あ、……イク…♡♡♡」

とちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅ……ツッ！！

♡♡♡

ぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんっ！！♡♡♡

ぢゅるっぢゅるっぢゅぶぶっ♡♡♡ぢゅぶっ♡♡

♡ぢゅぶぶるる…ッ♡♡♡

ぐちぐちぐちぐちッ♡♡♡ぐちぐちぐちぐちぐちぐちぐち…ッ♡♡♡

「あ～～ッ♡♡♡イク、う” ………！！♡♡♡」

ガクガクガク……ッ♡♡♡

激しく体を揺らしたあと、体がベッドへ落ちる♡

腕枕してくれていた美咲の腕が外され、今度それを受け取ったのは悠真だった♡

夢子の背中を自らのほうへ向けさせると夢子の片足を腕に引っ掛け大きく広げさせた♡

背中に悠真の胸の感触♡夢子がそれを感じてすぐ、

ぐ♡…ぶ♡

「あ…っ、は、あ♡」

後ろから、ちんぽが挿じ込まれてしまった♡

片足だけを上げられた姿勢によって狭くなっているおまんこを無理に押し広げるように♡

「きつつ…」

「あ…♡…あ、は♡」

後ろで呟いた悠真の息が耳に当たってくすぐったい♡

背中に密着している悠真の体も熱くて、いったばかりだと言うのに夢子の体ももう熱を持っている♡

「オレもキスしたいっす♡」

寝かせられた夢子の顔まで颯太がずり上がってきて、

「じゃあ私はまたここ♡」

入れ替わるように美咲が足元へ移動した♡

美咲が何をしようとしているのか分かって、

「あ、待ってくださ、」

夢子は慌ててその肩を掴もうとしたけれど、その手は颯太に取られてしまった♡

「気持ちよくなるだけだよ？」

「あ うっ♡」

ぐぼ…ッ♡♡

悠真も♡

腰を当て始める♡

斜め下から、夢子のおまんこを突き上げるように♡ちんぽを押し込むように♡

ぐぼ♡ぐぼ…っ♡ぐぼっ♡

「う、あ…♡♡あ♡」

今まで颯太のちんぽが刺激していたところとは全然違うところ♡

そこをえぐるようにちんぽが奥へ行ったり♡浅いところへ戻ったり♡

夢子のおまんこの中の形を変えてゆっくりとピストンしている♡♡

そして美咲は♡♡

「もうクリ勃ちっぱなしだね♡夢子ちゃんのちっちゃな可愛いクリちんぽ♡可愛がってあげたい…♡♡」

悠真のちんぽが埋められているその上、腫れて皮から
覗くクリトリスを♡

れろ～おッ♡♡

わざとらしく舐め上げて、

ぴたっ♡ぴたっ♡

と舌で叩いた♡

「ふッううッ♡♡♡」

さっき美咲にこねくり回されていたクリトリス♡
イって敏感になっているから舌の感触だけでぞわぞわ
と肌が粟立ってしまう♡♡

ぐぽっ♡♡ぐぽ、ぐぽっ♡♡ぐぽッ♡♡
「クリほんと好きだね、おまんこぎゅーって縮こまってる」

「……や、やだ、っ♡クリだめ♡」

ぴたっ♡ぴた、ぴたっ♡ぴたっぴたっ♡♡

「やじゃないでしょ～♡おまんこヒクついてるの外から
でも分かるよ♡♡」

「だめ、だめえ…っ♡♡」

ぐぽ♡♡ぐぽ♡♡ぐぽっ♡ぐぷ、ぐぽッ♡♡

ぴたぴたぴた…っ♡♡ぴた、ぴたっ♡♡

腰を掴まれちんぽを突き上げられて♡クリトリスは舌で優しく叩かれて♡

夢子の顔がとろけるように崩れていく♡♡

その顔に、颯太が唇を寄せてきた♡

「オレはキスしたい…♡」

「へ、…え」

ふとそちらへ視線をやると、すぐに唇を塞がれてしまった♡

柔らかい唇を押し付けられたあと舌が夢子の唇の隙間に差し込まれて、その舌は夢子の舌の先端からゆっくりと中を侵食していく♡

舌を撫で回され絡め取られ、奥まで入ってきて♡

それがなんとも言えない感触で♡

「んっ♡♡あ、あ…♡♡」

「キスも気持ちいいんだ？またおまんこ狭くなった」

(知らない、キスだけでこんな気持ちいいの知らない♡)

♡なんで♡全部されてるから？おまんこもクリも一緒に
気持ちよくされてるから…？♡)

ぐぽっ♡♡ぐぼ、ぐぷっ♡♡ぐぽっぐぽっ♡♡
ぴたっ♡♡れる、れる…♡ぴたぴたッ♡♡
奥へ奥へとちんぽは突かれ続け♡クリトリスも柔らか
い舌であやされる♡♡
ぢゅる……♡♡ぢゅ、ちゅうっ♡♡れ、ら…♡♡
それから舌まで捕まって♡♡

(何回もイってるのに♡まだ気持ちよくなっちゃう♡ず
っと気持ちいい♡気持ちいい…っ♡♡)

「んあ”ッ♡♡あ、…ふ、♡♡う♡♡ん、むッ♡♡う”、
ん…♡♡♡」

目を閉じて、気持ちいいことに集中してしまう♡♡
気持ちいいことを逃したくない♡全部欲しい♡
体がどんどん熱くなって汗が滲む♡
汗ばんだ肌を颯太の指先がくすぐるように滑ってそれ
にすら感じてしまって♡
体をくねらせると、

くりっ♡♡

「んは…ッ♡♡♡」

颯太の手が夢子の乳首を捕えた♡♡

その鋭い感覚で一瞬目を開けたけれど颯太は何も言わず、夢子の舌をしゃぶるように愛撫している♡♡

乳首を挟んだ親指と中指は乳首の根元を締めるように挟んで♡それから♡

しこ…っ♡♡

上下にしごき出した♡♡

しこ、しこ、しこ、しこ…っ♡♡♡

「あ、あゝ ……ああ！♡♡♡」

後ろから悠真に抱かれたままの体がビリビリと痙攣する♡♡♡

悠真がその夢子を制するように足ごと抱え直した♡

そして美咲はクリトリスが逃げないようにしっかりとその肉を手のひらで広げている♡♡

どす…ッ♡♡

悠真は気持ちよさのあまり身を振る夢子へ深く腰を突き入れ♡♡

ぢゅ……ッッッ♡♡♡

美咲はクリトリスを力いっぱい吸い上げた♡♡

「うゝ……ッ♡♡♡あ♡♡♡あゝ♡♡♡」

「こら、ちゃんとキスしてて♡♡」

急に体に与えられた重い快感に体が跳ねる♡♡

でも夢子の体に自由はない♡♡

舌は颯太に捕らえられ♡上半身は悠真に抱えられ♡クリトリスは美咲に晒されているのだ♡♡

(あ〜〜〜〜♡♡♡これやばい、また気持ちいいの来る♡♡気持ちよくされちゃう♡♡)

ちゅ、ちゅる♡♡ちゅろ、ちゅろ…♡♡ぢゅっ♡♡ぢゅるっ♡♡

「む、ん♡♡ん、う♡♡っ♡♡ふ、ッん♡♡」

舌は舌に濃厚に絡まれ♡♡

しこしこしこ♡♡しこしこしこしこ、しこしこ♡♡

「ん” …ツツ♡♡う” ♡♡う、う” ♡♡う、あ♡♡」

二本の指に挟まれた乳首は上下に擦られ♡♡

ぢゅ……ツツぽ♡♡ぢゅ〜〜〜ツツぽ♡♡ぢゅっ
ぽ♡♡

「ふ…っ、う” ツう♡♡♡ん、っふ♡う、っ♡♡♡」

クリトリスは丁寧に吸い上げられ、その先を唇で圧迫
されて♡♡

どすっ♡♡どすっ♡♡どすっ♡♡どすっ♡♡

「う” あッ♡♡あ”、あッ♡♡ん” んっ♡♡う” っ♡
♡」

お尻が波打つほどの勢いでそこに腰がぶつかってくる
♡♡

ちゅろ♡♡ぢゅる、ぢゅろろ…♡♡ぢゅ、ぢゅっ♡♡

しこしこしこ♡♡しこしこしこしこ♡♡♡

ぢゅ〜〜〜……っぽ♡♡♡ぢゅ……〜っっぽ♡♡♡ぢ
ゅうう……っっぽ♡♡♡

どすっ♡♡どすっ♡♡どすっ♡♡ばすっ♡♡ばすっ♡
♡ばすっ♡♡

「ん” あ” ツ♡♡あ” アあ♡♡んは、あ” ♡♡♡あッあ
” あ…ツ♡♡♡」

またされるがまま♡♡

気持ちよくされてしまう♡♡三人がかりで♡♡
舌も乳首もクリトリスもおまんこも♡♡
全て追い詰められていく♡♡♡

ちゅ、ちゅる、ちゅぶ♡♡ちゅろっちゅる♡♡ちゅ、
ちゅ♡ちゅっ♡♡ちゅうっ♡♡

しこしこしこ♡♡しこっしこっ♡♡しこっ♡♡しこっ
♡♡しこっ♡♡しこっ♡♡

ぢゅ……っぽ♡♡ぢゅ〜〜……っっぽ♡♡ぢゅ、…
……っっっぽ♡♡♡

どすっ♡♡どすっ♡♡どすっ♡♡ばすっ♡♡ばすっ♡
♡ばすっ♡♡ばすっ♡♡

(きもちい、きもちいい…♡♡これイク♡♡♡またイク
♡♡)

「あ”、は、ア♡♡う、あ”♡♡♡あ♡♡♡ア”♡♡♡
っ♡♡んあ”♡♡♡や、あ…ッ♡だめ、また……っ♡♡
♡」

夢子の口からそう漏れると♡

三人は動きを一定のリズムに変え夢子を追い詰め始め
た♡♡

しこ♡♡しこ♡♡しこ♡♡しこ♡♡しこ♡♡しこ♡♡
ぢゅっっぽ♡♡ぢゅっっぽ♡♡ぢゅっっぽ♡♡ぢゅっ
っぽ♡♡

ばすっ！♡♡ばすっ！♡♡ばすっ！♡♡ばすっ！♡♡
ばすっ！

しこ♡♡しこ♡♡しこ♡♡しこ♡♡しこ♡♡しこ♡♡
ぢゅっっぽ♡♡ぢゅっっぽ♡♡ぢゅっっぽ♡♡ぢゅっ
っぽ♡♡

ばすっ！♡♡ばすっ！♡♡ばすっ！♡♡ばすっ！♡♡
ばすっ！

「ふ、う` ツツ♡♡♡ん` あ♡♡♡あッあアあッ♡♡♡
すご、っ♡♡すごい、これ…、っ♡♡♡あ、あ♡♡♡あ
♡♡♡いくっ♡♡また、いく、ツツツ♡♡♡」

体のあちこちから快感の波が押し寄せて♡
夢子を追い詰める♡♡

「あ` アッ♡♡♡ア` ツツ♡♡♡いくっ♡♡いくっ、い
くっ♡♡♡い`、…………ツツツ！♡♡♡」

絶頂に体が強張るとナカのちんぽまできつく締め上げる♡♡

それに呻いた悠真にきつく抱きしめられながら、

「い …く、っっ♡♡♡あ ……………アッッッ！！♡♡♡」

夢子はまた大きく体をしならせていった♡♡♡

悠真のちんぽが抜かれ、乳首からは颯太の手が離れクリトリスからは美咲の唇が離れた♡

何度も達して敏感になった体は解放されたそれにすら感じてしまう♡

夢子が動けず肩で息をしていると、今度は颯太に体をうつ伏せに転がされた♡

「あ……、やだ、もう無理、です」

「そんなとろけた顔して何言ってんすか♡♡」

夢子の体を跨ぐ颯太♡

そして夢子の腰を掴み持ち上げると、夢子のおまんこを探るように既に勃起した芯を持つちんぽを動かし♡♡

どちゅっ♡♡

入り口を見つけると一気に奥まで突っ込んだ♡♡

「はア` う` ッ♡♡♡」

その衝撃に胸をそらす♡

颯太はその夢子の上半身が戻れないよう後ろから腕を羽交い締めにした♡♡

お尻にぴったりと颯太の腰がくっついている♡それほど深くまでちんぽが差し込まれているのだ♡♡

「は……、あ、は…っ♡♡」

お腹が圧迫される♡

夢子が浅い呼吸を吐くとそこへ悠真が顔を近づけてきた♡♡

「俺ともキスしょ？」

夢子の返事も待たずにすぐにその唇が近づいてくる♡

軽く何度か触れて、唇同士が密着するとそのまま少しだけ滑って唇を食まれた♡

感触を楽しむように食まれ、吸われて♡

普段から真面目で、どちらかというと大人しい雰囲気
の悠真♡

その彼に似合うようなキスで夢子は流されるように目を閉じようとした♡

カリッ♡♡

「…………ツッ！♡♡♡」

その優しさに似合わない、強い刺激が乳首を襲って夢子の体は大きく揺れた♡♡

「乳首されるとまんこすっごい締まる♡♡動いてなくても気持ちいい…♡♡♡」

背後にいる颯太がそう言って夢子のその体を制御するように更に力を込めた♡

カリッ♡♡カリッ♡♡カリ…ッ♡♡

キスしたままの悠真と、まつ毛の触れそうな距離で目が合う♡♡

怖いくらい真っ直ぐ夢子を見つめたまま♡

カリッ♡♡

カリカリカリカリカリッ♡♡

爪の先で乳首を擦っている♡

根元から先端までを掬い上げるように♡細かく♡♡

カリカリカリカリカリカリッ♡♡♡

「ふっう` う、う……ッッッ♡♡♡」

カリカリカリカリカリカリカリッ♡♡♡

「んっう` っう…ッ♡♡♡ん` 、んっあ♡♡」

小さな勃起の先端から快感が走って体が言うことをきかない♡

背中がガクガク震えて逃げたいのに♡♡

カリカリカリカリカリカリカリカリッ♡♡♡

「あ` 、んう♡♡うう` ……ッッッ♡♡♡」

カリカリカリカリカリカリカリカリッ♡♡♡

「ふッあ` ♡♡あ、うう♡♡ん` ッ♡♡あ` ♡♡♡」

「カリカリされるの気持ちいいね♡♡またこっちもしてあげようね～♡♡」

震えっぱなしの夢子の横から、今度は美咲が♡♡

夢子の腰に手を回し、もう片方の手がクリトリスを狙って♡♡

カリカリカリカリカリカリカリカリッ♡♡♡

「んあ` あッッッ♡♡♡」

クリトリスの先をくすぐるように引っ掻き始めた♡♡

カリカリカリカリカリカリカリカリッ♡♡♡

カリカリカリカリカリカリカリカリッ♡♡♡

後ろから羽交い締めになれちんぽを埋められながら♡
♡

大きく反らされて突き出した胸の先端と、逃げることもできない無防備なクリトリスを♡♡

二人に爪の先で細かく引っ掻かれる♡♡♡

「うあッ♡♡♡ア♡♡♡あ♡♡♡あ♡♡♡や、
め…ッ♡♡♡は、っア♡♡♡ああアッ♡♡♡
♡」

■続きは製品版にて♡